

薬師院：一区一館制度の成立

一区一館制度の成立

—— 名古屋市の図書館行政に関する歴史的再検討 ——

薬師院 はるみ

The Roots of “One Ward, One Library” Planning in Nagoya City:

A Historical Study of Library Management

Harumi YAKUSHIIN

1 はじめに

名古屋市は、全国に先駆けて、一区一館制と呼ばれる図書館計画を立て、それを着実に実行した都市として知られている。一区一館計画とは、文字通り、1つの区に1館ずつ図書館を設置していく計画である。現在、政令指定都市において、各行政区に少なくとも1つの図書館が存在するのは、当然のこととなっている。それどころか、1つの区にたった1つの図書館しか存在しないような状態では、全ての住民に十分なサービスを提供することは不可能だとまで考えられるようになってきている。実際、2004年度『図書館問題研究会の任務と課題』の中には、「大都市の図書館の一区一館制を打破しよう」¹⁾とまで書かれているのである。もちろん、図書館は、数が多ければそれでいいというわけでもない。しかしながら、1980年の『図書館白書』によれば、この時点でさえ、当時の9政令指定都市の内、各区に図書館が設置されていたのは、名古屋と、元々図書館を持つ5市が合併して誕生した北九州市のみであったとのことである。そのため、同書にも記されているように、「名古屋は1964（昭和39）年に1区1館設置を市の方針として確立した先進市」²⁾としてみなされてきたのである。

1964年当時の名古屋市には、3つの市立図書館が存在した。すなわち、1923年に市立名古屋図書館として開館し、現鶴舞中央図書館の前身となった鶴舞図書館、1925年に名古屋公衆図書館として創設された後、1939年に名古屋市に寄付され、現西図書館の前身となった栄図書館、そして、1960年に開館した熱田図書館の3つである。なお、栄図書館、熱田図書館、さらには、1964年5月に開館した南図書館は、いずれも名古屋の篤志家や企業による寄附が元で創られたとのことである³⁾。

南図書館開館後も、名古屋市では、東、中村、港、北……と年に1館から2館ずつ図書館を設置していき、1972年8月には、守山・緑両図書館の開館をもって、実質上の一区一館体制を確立するに至る。つまり、県立図書館が存在する中区を除き、全ての区に市立図書館を設置するに至るのである。その後、千種区と昭和区を分区して、それぞれ、名東区と天白区が新たに設けられ、名古屋市は今日の16区体制となるのだが、それに伴い、これらの区に対しても、速

やかに図書館が設置されている。

それにしても、なぜ、当時の名古屋市では、この計画に着手することとなったのだろうか。そして、「一区一館」という大変語呂のよい呼び方は、誰がどのような契機で使い始めたものなのだろうか。本論は、名古屋市における一区一館計画について、その誕生の経緯を追跡しようとする試みである。既存の関連資料をできる限り収集し、それらに記録された言葉を照合したり批判的に検討したりすることで、一区一館計画が実施されるにいたった要因について探ろうと思う。なお、本稿は、2006年11月29日に開催された、金城学院大学日本語日本文化学会秋季大会での講演を出発点に、分析対象とすべき資料等を新たに追加しながら、その内容を再構築したものである。

2 起源神話：1964年度市政世論調査

英国の図書館員マッコルビン（Lionel Roy McColvin）によれば、近代の公共図書館は、「需要のあるところに供給が生まれたのではなく、供給が需要をつくったというケース」⁴⁾ のことである。実際、個別具体的な例外はあるにせよ、図書館についてのイメージをほとんど持たない人々が、多数意見として、公共図書館の設置を希望するとは考えにくい。一方、残された文献の多くでは、名古屋市が一区一館制に踏みきった一要因として、当時の市政世論調査の結果が指摘されているのである。例えば、1966年2月の『図書館雑誌』において、当時の鶴舞中央図書館長渡辺政雄氏は、その2年前より開始された名古屋市の一区一館制について紹介する中で、次のように記している。

市で毎年行なわれている市政世論調査……の昭和39年度版で、はじめて文化施設についての市民の希望が鮮明になった。……このデーターが一区一図書館の必要性を裏付けたものであり、設置順位の決定についても重要な参考資料となっている⁵⁾。

その約4年後の『図書館雑誌』においても、当時、鶴舞中央図書館に勤めていた日比野進氏により、同様の指摘がなされている。すなわち、「名古屋市が……積極的に図書館建設に乗り出した要因」としては、「なによりも、市政調査などに表明された図書館建設をのぞむ（それも数多くをという）市民の声と、それをとりあげた市長をはじめとする上層部の英断が、あずかって力があったといえる」というのである⁶⁾。さらには、その3年後、つまり、名古屋市が実質上の一区一館体制を一旦完成させた翌年に相当する1973年にも、『中部図書館学会誌』において、当時、瑞穂図書館で管理係長の職にあった清水庸之氏が、「毎年行われていた市政世論調査（昭和39年版）によって、文化施設としての図書館の建築を希望する市民の声が多かったのも、この計画の実施に及ぼす強い要因であった」⁷⁾と主張している。あるいは、1980年代にも、当時、天白図書館に在職していた和田匡弘氏や、鶴舞中央図書館に在職していた尾頭良造氏らにより、図書館関係の雑誌において、同様の言及がなされている^{8) 9)}。

また、1980年代には、この市政世論調査に関する同様の記述が、図書館史の概論書にまで登場する。すなわち、1986年刊行の『図書館発達史』には、「昭和三十九年八月に市が実施した世

論調査の結果、市民が設置を希望する文化施設のトップに図書館が指名されたことから、市では市政の重点課題に図書館を位置づけ、一区に一館の図書館整備計画を決定し、その早期実現をめざすことになった¹⁰⁾と明記されているのである。それだけではない。2001年には、建築関係の雑誌にさえ、この世論調査のことが記されているのを見つけることができる。なお、これは、一区一館計画を受けて中村図書館へと改装されることになった稲葉地配水塔について、建築学的な側面から考察がなされているものである¹¹⁾。要するに、文献的に追跡した限りにおいて、1964年度市政世論調査の結果が、名古屋市に一区一館制を開始させるにいたった要因の一つであるということは、共通認識として語られており、すでに定説化しているといっても過言ではないのである。

しかしながら、私は、この定説を無条件に信じることができなかった。というのも、この定説は、例えば、先のマッコールビンによる指摘とは明らかに矛盾する。つまり、ここで語られている事柄自体は事実なののだとしても、当時の名古屋市には、世論として図書館を希望する何らかの要因が存在したのではないかと考えたのである。仮にそうであるなら、いったいそれは何なのか。そして、そもそも、これらの文献で頻繁に語られてきた市政世論調査とは、いかなるものなのだろうか。そこで、これらの点について解明すべく、まずは、この市政世論調査の現物にあたり、その検討を試みた。

3 世論の形成：行政側の要望

名古屋市政世論調査とは、1961年度より現在に至るまで、毎年1回、20歳以上の名古屋市民を対象に実施されているものである。調査項目は年度ごとに異なるものの、数年あるいはそれ以上にわたって同様の設問が設けられることも多い。ところで、先に取り上げた1964年度調査¹²⁾は、第4回目のものに相当するのだが、その調査において、問題の設問は、第15問目であった。すなわち、そこには、「Q15. あなたは、これからの名古屋に、どんな文化施設があってほしいと思いますか」との問いが設けられているのである。この問いに対して、確かに、11.2%の回答者が、「図書館」と答えていた。そして、この数値は、その他の回答、すなわち、市民ホール等（6.5%）や博物館（3.4%）、美術館（1.6%）、科学館（1.4%）など、具体的な施設名を挙げた回答の中では、一番大きい値を示していることも事実である。しかしながら、それと同時に、57.7%にも相当する人が、「特になし、わからない」と答えていたこともまた、事実なのである。いうまでもなく、この数値は、図書館を希望する回答の、実に5倍にも相当する。ところで、この調査結果は、同年11月の『広報なごや』でも紹介されているのだが、そこには、次のように記されている。

……自由に答えてもらったものを施設別に集計すると、図書館を筆頭に演劇・音楽などの市民ホール、博物館、美術館の順でした。そこで、その図書館について“こんご何を望むか”をたずねると、大半の人が「数多くの図書館をつくってほしい」と答え、ついで「巡回文庫を多く」「夜間も開いてほしい」となっていました¹³⁾。

注目すべきは、上記、「そこで、その図書館について“こんご何を望むか”をたずねると」との記載である。というのも、この記載を字義通りに眺めた場合、あたかも、図書館を望む声が一番多かったとの結果を受けて、「図書館について“こんご何を望むか”をたずね」たかのようにも解釈できるからである。ところが、実際には、設問Q15の直後には、図書館への要望だけを尋ねる設問が予め3つも設定されている。換言すれば、それら3つの設問は、Q15で多くの人が「図書館」と答えようと答えまいと、最初から用意されているのである。つまり、これらの事実を考慮すれば、上述の『広報なごや』に記された表現は、どこか不正確であると判断せざるを得ないであろう。

加えて、指摘すべきは、この調査の設問配分である。この年度の名古屋市政世論調査には、合計22問の設問が用意されている。ところが、そもそも合計22問しか存在しない設問の内、図書館に関する事柄を直接尋ねるためのものが3つも設定されており、いうまでもなくそれは、設問数全体の約7分の1にも相当することになる。なお、それらの設問とは、具体的には、「Q16. あなたは、この1年間に、市や県の図書館を利用したことがありますか」、「Q17. あなたは、これからの図書館に何をのぞみますか」、「Q18. あなたは、どんな本を図書館で借りたいと思いますか」の3つである。そして、これらの設問に関しても、いくつかの無視できない点が存在する。

まずは、Q17についてである。これは、上記『広報なごや』に記載されていた「“こんご何を望むか”をたずねる」ものに相当すると思われる。この設問には、いくつかの選択肢が用意されているのだが、調査結果によれば、それらの選択肢の内、「数多くの図書館（分館）を作ってほしい」を選んだ人は、24.1%だったとのことである。なるほど、これは、この設問の解説部分に明記されている通り、「答えを書いた人の約半数近く」であるには違いない。しかしながら、その一方で、「特にない」を選択した人が46.4%も存在する。ということは、『広報なごや』に記されている「大半の人」との表現にしても、どこか恣意的であることは否めない。

次にQ16についてである。過去1年間における図書館利用の有無を尋ねるこの設問では、利用したことが「ある」と答えた人に対してはその目的を、そして、「ない」と答えた人に対してはその理由を尋ねる下位質問が設定されている。いずれの下位質問にも、いくつかの選択肢が用意されているのだが、利用したことがない人を対象とした下位質問において、「交通が不便で利用しにくいから」を選んだ人は、全体の5.1%、それに対して、「利用するひまがないから」を選んだ人は、56.6%とだったとのことである。つまり、後者の数値は、前者の数値の10倍以上にも相当するのである。そして、この調査結果を常識的に判断すれば、問題は、単に図書館数を増やすことだけで解決できるようなものではないということがわかるであろう。ところが、この世論調査の解説箇所には、ただ単純に次のように記されているのである。

要は便利なところに図書館をつくれば、ひまがないから利用できないという人たちにも、もっと利用されると思われる¹⁰⁾。

この当時、図書館の増設を望んでいたのは、むしろ行政側だったのではないだろうか。そし

薬師院：一区一館制度の成立

て、この疑念は、1964年度の第4回市政世論調査を、他の年度のものとは比べることで、より深まることになる。例えば、1961年度の第1回調査から1980年度の第20回調査までの内、図書館に関することだけを尋ねる問いが設けられているのは、上記1964年度の第4回調査のみである。そもそも、この調査において「図書館」という言葉自体、1964年度調査に初めて登場するのである。以上のことから、この当時、市立図書館の分館増設を強く希望していたのは、市民の側というよりは、むしろ行政の側であったことは明らかだといえるだろう。市民の側に要望がなかったというのではない。実際、以下でも述べるように、この時代には、一部の市民から、図書館設置を希望する声が提出されていたことも事実なのである。けれども、以上の諸事実から総合的に判断する限り、当時の名古屋市当局には、市民が望む以上に、図書館への要望が存在していたと判断せざるを得ないのである。

4 構想の始まり：歴史的遡及

1964年11月25日開催の名古屋市会会議録には、第17代名古屋市長・杉戸清氏による、「……図書館とかプールなどにつきましては、できるだけ各区に一つずつつくっていききたいというような方針で進んでおる次第でございますし、……」¹⁵⁾との答弁が記録されている。同会議録によれば、この当時、すでに、「中村区をはじめ三区に図書館が建設されつつあり、加えて、市長は、テレビ番組『市長さんこんにちは』の対談において、「まことに軽快なタッチで、来年度は文化施設を大いにつくっていききたい」と発言していたとのことである。そこで、こうした諸状況を受け、津川康郎議員が、上記対談における発言の具体的な構想や内容について質問したのである¹⁶⁾。

また、名古屋市総務局発行の『市制100周年記念誌』に掲載されている年表には、上記市会の5日前に相当する1964年11月20日に、名古屋「市は各区一図書館建設を発表」¹⁷⁾したと記録されている。けれども、同記念誌の中にこの年表記載事項に関するその他の情報は一切見当たらず、また、この記載を裏付けるその他の情報源をみつけることもできなかった。そのため、この発表が、どのような形でなされたものなのか等、その具体的な内容については明らかになっていない。それでも、これらの資料のみから判断すれば、一区一館との方針は、8月に実施された第4回市政世論調査の結果を考慮し、その後公表されたのだとみなすこともできよう。

だが、残された資料はこれらだけではなかった。例えば、1964年5月3日付『中部日本新聞』には、前日に行なわれた南図書館完工式の様子が報じられているのだが、その記事において、杉戸市長による、「各区に一図書館という市の方針の第一歩が実現できた」¹⁸⁾との言葉が記録されているのである。ということは、この方針は、遅くとも上記「発表」の6ヶ月前、そして世論調査が実施される3ヶ月前には、すでに「市の方針」となっていたということになる。

それだけではない。1964年2月29日開催の名古屋市会会議録には、杉戸市長が、1964年度の一般会計歳出予算の概要を説明する際に、「……栄図書館の移転改築、図書館二館及び市営プール二カ所の新設等施設の強化と、文化・成人・視聴覚教育の推進を図るため、五億一千四百余万円を計上」¹⁹⁾したと述べたことが記録されており、この様子は、翌月5日の『広報なごや』で「図書館二館、市営プール二カ所新設」²⁰⁾との小見出しの下で報じられている。また、この

移転改築に伴って栄図書館長から西図書館初代館長へと異動した勅使逸雄氏は、その2年後の『図書館雑誌』において、これは、「施設の老朽化と一区一図書館という市の構想とにより、新築移転が実現した」²¹⁾ ものであると語っている。ということは、栄図書館の移転改築予算が計上された1964年2月末の時点で、「一区一図書館という市の構想」がすでに既定路線となっていたとも判断できるのである。だとすれば、一区一館は、何時から市の方針として採用されたのだろうか。そしてそもそも、この考え方は、何時、誰によって構想されたものなのだろうか。

名古屋市図書館システム研究会による研究報告書『忘れぬうちに』には、同研究会「が調べた一区一図書館の最も古い文献」²²⁾ は、1953年11月10日付『中部日本新聞』の記事だと記されている。なお、名古屋市図書館システム研究会とは、1968年4月より、図書館職員による研究活動の奨励、及び研修を実施すべく発足した名古屋市図書館研究会に承認された研究グループの一つだということである²³⁾。ともあれ、実際にその新聞記事には、同年7月24日に鶴舞図書館長に就任したばかりの赤木貞夫氏が協議の結果まとめ、「さっそく具体化に乗り出すことになった」新構想の一つとして、「将来は同図書館を市の図書館センターとして現在中村、西の両区にしかない分館を全区に設けるようにする」ことが明記されている²⁴⁾。ただし、上記中村、西両区の分館とは、1945年3月19日の名古屋大空襲により市立名古屋図書館本館が焼失し、1952年8月1日に鶴舞図書館として再建されるまでの間に、図書館活動を再生させるべく開設された4分館の内の二つであり、いずれも係員1名、蔵書3,000冊内外のきわめて小規模なものであったとのことである²⁵⁾。換言すれば、後に開始されることとなる一区一館政策下での「分館」は、ここで言及されている「分館」とは明らかに性質の異なるものである。そして、この新聞記事が発表された2年後より栄図書館整理部に配属されることとなる中村幸夫氏が上記研究会のインタビューに答える中で語っているように、「鶴舞図書館が第一期工事を完了したばかり……のこの頃に、全市的なこんな構想は夢物語だとは思えない」²⁶⁾ というのが実情だったようである。

また1950年代半ばの時点で、この構想がまだ「夢物語」に過ぎず、決して現実味をおびたものではなかったこと、しかしながら、赤木館長による強い「夢」でもあったことは、1956年6月の、同館長による『鶴舞図書館だより』巻頭文からも読み取れる。そこには、次のように記されているのである。

1区1分館、少くとも蔵書3万冊以上と、夢に描き希望に胸をふくらまして、おもや経営さえ意にまかせぬ嘆きを、梅雨空のもとにくり返すのみ……²⁷⁾。

なお、ここで補足説明しておく、上記「おもや」とは、文脈的に判断して、鶴舞図書館のことを指しているものと思われる。赤木館長は、就任2日後の『朝日新聞』でも、「これまで鶴舞、栄両図書館、亀島分館、西公民館、蓬左文庫など市内各図書館がバラバラに運営されてきたが、今後は鶴舞を中心的一元的な図書館行政を行いたい」²⁸⁾ との抱負を語っており、当初より、「おもや」、すなわち、鶴舞図書館を中心とした分館網についての構想を持っていたよ

うである。ここでいう「亀島分館、西公民館」とは、それぞれ、上述の中村、西両区の分館のことを指している。また、蓬左文庫は、1978年より名古屋市博物館の分館となるのだが、それ以前には、鶴舞図書館の分館として位置づけられたこともあったようである。ただし、それは、1961年以降のことであり、この新聞記事発行当時には、まだ正式に分館としてみなされていたわけではない²⁹⁾。

話を元に戻そう。以上より、日比野氏が述べるように、たしかに、「ことばとして一区一館を言い出したのは赤木さんが最初」³⁰⁾である可能性が高いものと思われる。ただし、それは、公的な場面に限って考えた場合のことである。だがその一方で、その実現可能性はともかく、一区一館という構想自体は、すでにこの時点で、赤木館長によってなされていたということでもある。そして、以下で述べるように、一館長によるこの構想は、その他の図書館関係者からも構想されるようになり、徐々に図書館外部の人たちからも「夢に描」かれることとなってゆくのである。

5 一区一館の先史時代：市長に手紙を出す週間

いくつかの文献では、上述した1956年6月の赤木館長による『鶴舞図書館だより』巻頭文を、「一区一館制」の初出資料として位置づけている^{31) 32)}。けれども、実際には、先述のように1953年11月の『中部日本新聞』の記事が存在し、さらには、1955年12月の『鶴舞図書館だより』の中にも、「亀島・西区の両分館」に関して、「各区に一つずつの分館を設置するという本館の未来図のひとつの足掛かり」³³⁾との言葉を見つけることができる。要するに、これらの諸事実から判断しても、この『中部日本新聞』の記事内容が、当時の図書館関係者に実現可能性の高いものとして注目されていたとは思えない。

そうではあるが、一区一館構想が公に語られた1950年代前半から、それが実際に実現した1964年までの期間は、この構想が一步ずつではあるものの、確実に形を得ていく時でもあった。そこで、以下では、その過程について追跡してみることとする。

1957年1月の『鶴舞図書館だより』巻頭文の中で、赤木館長は次のように述べている。

幸に僚友である栄図書館の移転新装が立派に竣功して巡回自動車の運営も好評裡に成果を収め、図書館への関心と期待が強くなった今日今年こそ、多年の懸案を一挙に解決して専門・参考図書館としての性格を打出す絶好の機会であろう。……昨秋の「市長へ手紙を出す週間」のトップを占めた教育関係のものゝうちで分館によせて『1区1館』を提唱し要望しているのが相当数あった³⁴⁾。

実際、1956年11月の『広報なごや』にも、同年の「市長に手紙を出す週間」において、一般市民より、図書館増設を希望する意見がよせられたことが記録されている³⁵⁾。なお、「市長に手紙を出す週間」とは、小林橘川第16代市長の下、10月1日から7日までの1週間、市制65周年記念事業として、1954年より開始されたものだということである³⁶⁾。また、この記事のすぐ右隣には、上記赤木館長の言葉にもあるように、移転新装した栄図書館についてと、寮金吉・

栄図書館長による同館の改装内容や今後の抱負を記した記事が掲載されている。つまり、この情勢に着目するなら、当時の状況として、上の「図書館への関心と期待が強くなった今日今年こそ」との発言は、それなりの根拠があったものとして捉えることができよう。

けれども、上記『広報なごや』をみる限り、たしかにそこには、「図書館をふやせ」との意見がよせられたと書かれているものの、それがすなわち『《1区1館》を提唱し要望している』ものであるのかどうかは疑わしい。また、この意見は、教育文化に関する意見の内、「PTAの負担軽減を」と並んで最多数ではあるものの、僅かに5件である。つまり、意見総数327件中1.5%にすぎず、例えば、16件存在した「道路の拡巾と舗装を早く、特にバス道を」等と比べた場合、必ずしも「相当数」とは言い切れない。

さらに注目すべきは、翌年1月、すなわち、上記巻頭言と同じ月に発行された『広報なごや』である。そこには、読者からの投稿という形で、「市長への手紙」の内、教育関係では「図書館をふやせ」との意見が多かったことに対する批判的な意見が載せられている。「多額の費用を要する派手な新規事業よりも、既定計画を完全に実施すること」、つまり、図書館をふやす「よりも、現在ある図書館を充実させて活用することが先決問題と思う」との見解を示した投稿文が掲載されているのである³⁷⁾。この当時の『広報なごや』では、読者からの投稿が掲載されていること自体が稀である。つまり、この投書が掲載されたことは、単なる偶然の出来事として片付けてしまえるようなものなのだろうか。いずれにせよ、上記『《1区1館》を提唱し要望しているのが相当数あった」との言葉は、やや誇張された表現であるといわざるを得ないのである。

けれども、この言葉は、赤木館長による強い希望が表現されたものであったということなのであろう。なお、翌1957年の「市長に手紙を出す週間」では、「巡回文庫自動車を増車せよ」との意見が10件寄せられているものの、「図書館をふやせ」との要望はなかったようである³⁸⁾。けれども、1958年には、僅かに1件ではあるが、「児童が静かに勉強できる小図書館を各区に」との意見が寄せられている³⁹⁾。ただし、その翌年、つまり、1959年11月の『広報なごや』は、同年9月下旬の伊勢湾台風の影響からか発行されておらず、従って、「市長に手紙を出す週間」が実施されたのかどうかについても定かではない。さらに、1960年11月の『広報なごや』にも、「市長に手紙を出す週間」に関する記事は掲載されておらず、代わりに、すでに病に倒れ入院中の小林市長による文章が掲載されている⁴⁰⁾。そして、以後、小林市長が「手紙」を受け取ることはなかったのである。

6 表舞台への道のり：幻の選挙公約

1950年代後半の時点において、図書館増加を望む声は、「市長に手紙を出す週間」などを通じ、一般市民からも聞かれるようになってきていたようである。ただし、それらは、散発的なものであり、市の人口や「手紙」の投書総数等から考えれば、必ずしも多数派意見とはみなし難い。また、この時点においては、まだ、行政側に何らかの具体的な計画があった形跡もみあたらない。それでも、この時期には、名古屋の図書館界にとって特筆すべき二つの出来事が存在する。その1つ目は、1959年4月5日に、愛知芸術文化センター愛知県図書館の前身である

薬師院：一区一館制度の成立

愛知県文化会館愛知図書館が、栄地区に開館したことである。

そしてもう1つは、1960年9月1日、第3番目の市立図書館として熱田図書館が開館したことである。同図書館開設の経緯について、初代館長服部鉦太郎氏は、次のように語っている。

たまたま、東邦ガス株式会社が名古屋市との報償契約改訂を記念して2,500万円を寄附したいと市へ申出があった。強く打出されていた図書館設置の声が市当局を動かし、今回は南部方面に建設が本きまりとなり、適当な用地を求めたところ、熱田神宮の好意によってその境内の一部に敷地を求めることが出来た⁴¹⁾。

ここでいう、「強く打出されていた図書館設置の声」が、具体的には何を指しているのか定かではないが、この頃には、名古屋市において、図書館への要望が少しずつ見受けられるようになっていたのかもしれない。例えば、まさに時を同じくして、次のような逸話が残されているのである。

1960年9月18日「の市長選は革新の小林橘川氏が三選を果たすが、対立候補の保守・辻寛一氏が公約の一つとして『一区一館制』を打ちだ」したとのことである。しかしながら、和田氏が述べるように、この公約は、辻氏が「選挙に敗れたこともあり実現はされない」こととなる⁴²⁾。なお、同年8月30日の『朝日新聞』では、辻氏や小林氏等、立候補者の公約が掲載されているのだから、そこには、「一区一館制」との文言は見当たらない。あえて挙げれば、辻氏による「市民文化センターの新設（各区ごとに）……に努力する」⁴³⁾との公約を見つけることができるのみである。

しかしながら、この件に関しては、先にも取り上げた名古屋市図書館システム研究会による研究報告書『忘れぬうちに』においても、当時栄図書館に配属されていた中村氏が次のように語っている。

その当時、栄でまかれたチラシを、越沢さんが持ってきて職場で回して、これからは名古屋市の1区に1図書館ができるんだ、と喜んでいて……状況を覚えている。……後に、そのチラシが、選挙資料の一部として選管に残っているのではないかなと思って選管事務局へ行って、……辻寛一の市長選挙に関する資料を全部当たってみたが、そのチラシは出てこなかった⁴⁴⁾。

さらに、同じく当時栄図書館職員であった伊藤正行氏も、この件に関しては、中村氏から聞いたことがあると証言した上で、当時においては、「市の方でもある程度方向性は出ていた。それを昭和35年辻氏が上手に拾い上げたのではないか」⁴⁵⁾と述べている。

そして、この時、この「方向性」を「上手に拾い上げた」のは辻候補だけではなくであったようである。1960年12月の『鶴舞図書館だより』によれば、上記選挙戦直後の1960年10月28日、読書週間の期間中に鶴舞図書館会議室で開催された図書館運営懇談会において、「名古屋市社会教育委員の方々から……新設の熱田図書館のような地域性のある図書館を各区1館ずつくらい

建設されるべきだという意見が出た」⁴⁶⁾とのことである。

以上のように、この時期においては、新たな市立図書館が開館するなど、大きな動きが見られるものの、一区一館という構想がそれほど現実味を帯びたものであったとは言いがたいのかもしれない。それでも、単なる構想が、一つの方向性を獲得しつつあったことだけは事実であろう。ただし、この方向性が具体的な流れを形成するのは、小林市政に続く杉戸市政の時代のことである。そこで本章の最後に、杉戸市長に一区一館制の実行を決断させる上で重要な役割を果たしたと考えられているもう1人の人物に焦点を当て、この構想が具体化するにいたるまでの動きを概観する。

7 一区一館の黎明期：夢から具体的構想へ

1982年度全国図書館大会福井大会では、開会式に引続き、青山大作氏に感謝状が贈呈されている。同年の「全国図書館大会報告」によると、青山氏は、「今日みる同市1区1館図書館の実現に尽力」⁴⁷⁾したとのことである。青山氏とは、1956年4月より1959年7月までの3年余り、鶴舞図書館初代副館長を務めた人物であるが、それ以前にも、1920年より帝国図書館に勤務し、その傍ら1937年より図書館講習所講師を務め、1941年からは、その2年前に名古屋市に移管された市立名古屋公衆図書第2代館長に着任したという経歴の持ち主である。つまり、赤木館長と比較すると、鶴舞館着任以前より、図書館との関わりが非常に深いということになる。

また、1984年11月の『図書館雑誌』には、当時の鶴舞中央図書館長山本進氏により、同年7月30日に逝去した青山氏への追悼文が掲載されているのだが、その中でも、次のように記されている。

鶴舞図書館副館長として戻られた昭和31年から退職されるまでの3年間の事績のなかで、何時も話題になるのは、今の名古屋市の図書館網形成の布石となった、一区一図書館への着想があった⁴⁸⁾。

ただし、上記「昭和31年」は、先述した「一区一図書の最も古い文献」である『中部日本新聞』の記事が発表された2年以上後のことであり、「一区一図書館への着想」自体は、赤木館長によるものであった可能性が高い。それでも、山本氏によれば、「昭和30年代前半、名古屋市の図書館政策において、当時鶴舞図書館副館長として、市長はじめ、市の幹部に名古屋市の図書館将来構想を吹き込んだ青山大作氏存在と活躍は、この地方の館界にあまねく知れわたっている」とのことである。すなわち、1区に1館という「当時としては破天荒な、図書館網構想が実現することとなった」背景には、「青山さんが歩まれた行政畑の人脈へのくい込みがあったことも忘れてはならない」というのである⁴⁹⁾。実際、青山氏の没後に出版されることとなった論集『図書館随想』では、上記「行政畑の人脈へのくい込み」や、「市の幹部に……図書館将来構想を吹き込んだ」ことを裏付けるかのような諸記述を見つけることができる。

例えば、同書には、小林市政下の1959年1月、東邦ガス株式会社より、名古屋市に対して、使途を指定しない2,500万円の寄付があった時のことが記されている。それによれば、この寄

薬師院：一区一館制度の成立

付金を熱田図書館設立に充てることを提議し、それを実現させたのは、当時の市助役斎藤武夫氏であったとのことである。そして、この時、斎藤助役より青山氏に対して、「若し図書館を建てるのであればどのような構想がよいか」⁵⁰⁾との相談が非公式にあったということである。

あるいは、杉戸元市長も、この論集に収められた追悼文の中で、次のような逸話を述べている。

小林市長さんが逝くなられて、私が、妙ないきさつから、その後任の市長選挙に立候補するようになった時のことが、今更のように思い出されますが、その選挙戦の最中に、私の選挙事務所へ、度々応援にお出を頂いたようなことでした。その時に、青山さんが熱心に仰しかったことですが、「杉戸さん、どうか一区に一図書館を造るということを公約として、かかげて下さいよ」ということでした⁵¹⁾。

この論集で、青山氏自身は、自らが杉戸市長に対して、「一区に一図書館を造る」よう要請したとは述べていない。けれども、「同市長が第一期の市長立法補の際、その政見の一端として市内の各区に図書館設置を公約し、市長就任とともに、この公約を着実実現し、さらに同氏が市長に再選後もこれを継続した」⁵²⁾との回想を記している。青山氏が鶴舞図書館副館長を勤めたのは1959年7月までなので、これは、図書館嘱託の時期にあたる。ともあれ、これらの諸記述を参照するなら、1961年4月の市長選でも、選挙公約として、各区への図書館設置が掲げられていたということになる。

だが、少なくとも、1961年4月27日、すなわち名古屋市長選挙投票日前日の『中部日本新聞』に掲載された、杉戸氏をはじめ各候補者による選挙公約の中に、図書館設置に関するものは見当たらない⁵³⁾。一方、任期満了に伴う次期市長選では、杉戸候補が「各区に図書館、公営プール、各学校に講堂とプールをつくる」⁵⁴⁾と公約したことが、1965年4月25日の『中日新聞』1面に掲載されている。つまり、実際に公約を発表したのは、第一期目ではなく、第二期目であった可能性も捨てきれないのである。

けれども、杉戸市長第一期目の任期期間中に相当する1962年6月5日付『広報なごや』には、杉戸市長による、「勤労青年のために、図書館だって各区に一ヶ所ずつ設けたいんですがね」⁵⁵⁾との発言が記録されている。これは、名古屋市教育委員かつ名古屋科学館開設準備委員の清水勤二氏、名古屋タイムズ編集局次長森竜光氏、そして杉戸清名古屋市長の3者による鼎談での発言である。また、1963年の秋頃開催された市立図書館創立40周年記念パーティの席上で、当時の鶴舞図書館長丸山武氏は、「ここ数年を出でないで1区1館の目標に近づくであろう」⁵⁶⁾という趣旨の挨拶を述べたとのことである。ただし、ここでいう「目標」が、丸山館長個人ないしは図書館関係者らによる目標だったのか、それとも、すでに名古屋市としての目標となっていたのかについては定かではない。

以上より、公約が具体的にいつであったのかはともかくとして、名古屋市で1区に1図書館を設置する方針が決定されたのは、杉戸市長1期目の任期期間中だったと判断するのが妥当だと思われる。そして、市当局にその決定を促す上で重要な役割を果たした人物の1人が青山氏

だったということになろう。赤木館長はじめ名古屋の図書館関係者が夢に描き、市当局へ働きかけてきたことが、10年の歳月を経て、遂に実現することとなったのである。

8 おわりに

これまでみてきた通り、残された諸資料を厳密に解釈し、かつ相互に考証した場合、それらの間には、いくつかの齟齬がみられることもある。おそらく、残された記述は、いずれも虚偽ではないに違いない。むしろ、そこには、様々な人物や団体が、それぞれに深く関わっていたと考える方が妥当なのであろう。逆に言えば、一区一館制度の成立は、特定の者たちの意図や行為に還元することはできないということなのである。

先述の研究報告書『忘れぬうちに』の中でも、当時の栄図書館長勅使氏が、インタビューに答える中で、次のように語っているのをみつけることができる。

昭和38年12月の館長会で丸山さんから、市長が今年の新年記者会見で発表するのにふさわしい新年度計画をなるべく早く提出して欲しいと教育長から話があり、図書館の案を出して欲しいといわれた。……そこでぼくが「語呂」がいいことが一番だといって「一区一館」はどうだろうと言ったら、……それが1月8日記者会見の翌日新聞に大きく載りこちらがビックリしたほどでした⁵⁷⁾。

ということは、「一区一館」という言葉の発案者は、栄図書館長勅使氏であったという可能性も浮上するのである。けれども、ここで語られている市長による新年記者会見の記事を見つけることはできなかった。それでも、1964年1月7日付『朝日新聞』紙上には、当時の名古屋市教育委員会教育長加藤善三氏が、「私の持論は、図書館を一区に一館つくること」⁵⁸⁾だと述べたことが記載されている。また、その3日後の『毎日新聞』紙上でも、同じく加藤教育長が、25年先に控えた「市制百年目の夢」を語る中で、「クラブハウスを兼ねた図書館は各区ごとにつくられ」⁵⁹⁾との言葉を残している。

いずれにせよ、ある時代における様々な場面で図書館の充実が語られ、明確な起点を欠きながらも、一区一館制が形作られていったのである。おそらく、その背後には、多くの者を一定方向に後押しした時代的な社会背景が存在するに違いない。それを解明することが、我々に与えられた次なる課題なのであろう。

なお、本稿に関する研究を進めるにあたっては、名古屋市立図書館で長くご活躍され、館長もお務めになった後、現金城学院大学非常勤講師をなさっている山田直樹先生より貴重な資料をご提供いただきました他、ご経験に裏付けられた数々のご助言をいただきました。また、同じく名古屋市立図書館で第一線にお立ちになり、館長もお務めになった小木曾真様からも、今となっては得がたい多くの情報を提供していただきました。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

薬師院：一区一館制度の成立

〈注〉

- 1) 『図書館問題研究会の任務と課題 2004年度』
<<http://www.jca.apc.org/tomonken/ninmu04.html>>. [引用日：2006-12-12]
- 2) 日本図書館協会編『図書館白書1980：戦後公共図書館の歩み』日本図書館協会、1980、56p、p. 47.
- 3) 「名古屋市図書館公式HP 図書館ガイドマップ」<<http://www.tsuruma-lib.showa.nagoya.jp/>>.
[参照日：2006-12-13]
- 4) 森耕一『図書館の話』至誠堂、1981、318p、p. 145.
- 5) 渡辺政雄「一区に一図書館をめざす名古屋市」『図書館雑誌』Vol. 60, No. 2, 1966.2, p. 76-79., p. 77.
- 6) 日比野進「図書館網をひろげる名古屋市」『図書館雑誌』Vol. 64, No. 4, 1970.4, p. 161-163., p. 161.
- 7) 清水庸之「名古屋市の図書館網：その現状と課題」『中部図書館学会誌』Vol. 14, No. 3, 1973.10, p. 45-56., p. 45.
- 8) 和田匡弘「名古屋市図書館のあゆみ：一区一館制を中心に」『季刊としょかん批評』Vol. 2, 1983.4, p. 179-190., p. 180.
- 9) 尾頭良造「名古屋市の一区一館制のあゆみとこれからの展望」『みんなの図書館』No. 131, 1988.4, p. 10-15., p. 10.
- 10) 佐藤政孝『図書館発達史』みずうみ書房、1986、368p、p. 317.
- 11) 瀬口哲夫「名古屋の二つのシンボル：東西の配水塔を再生活用」『ARCHITECT』No. 153, 2001.6, p. 4-5., p. 4.
- 12) 名古屋市広報室編『第4回 名古屋市政世論調査』名古屋市、1964、44p.
- 13) 「あなたはどうお考えですか：第4回市政世論調査の結果から」『広報なごや』No. 201, 1964.11.5, p. 2.
- 14) 前掲12)、p. 35.
- 15) 『名古屋市会会議録』昭和39年第15号、1964.11.25、p. 20.
- 16) 前掲15)、p. 13.
- 17) 名古屋市制100周年記念誌編集委員会編『なごや100年：市制100周年記念誌』名古屋市総務局、1989、304p、p. 234.
- 18) 「寄贈した田中さんらテブ切る：南図書館の完工式」『中部日本新聞（市民版）』1964.5.3、p. 9.
- 19) 『名古屋市会会議録』昭和39年第1号、1964.2.29、p. 14.
- 20) 「予算市議会開会中：総額1,127億円の当初予算案提出」『広報なごや』No. 192, 1964.3.5, p. 1.
- 21) 勅使逸雄「親しまれている名古屋市西図書館」『図書館雑誌』Vol. 60, No. 4, 1966.4, p. 152-153., p. 152.
- 22) 名古屋市図書館システム研究会編『忘れぬうちに：昭和30年代の名古屋市図書館を語る』名古屋市図書館システム研究会、1992、132p、p. 13.
- 23) 日比野進「名古屋市図書館職員の研究・研修体制：名古屋市図書館研究会のあゆみ」『専門図書館』No. 126, 1989, p. 1-5.
- 24) 「将来は全区に分館：鶴舞図書館新構想まとまる」『中部日本新聞（市民版）』1953.11.10、p. 5.
- 25) 愛知県教育委員会編『愛知県教育史 第5館』愛知県教育委員会、2006、701p、p. 198.
- 26) 前掲22)、p. 56.
- 27) 赤木貞夫「どちらが先か：分館網の拡充について」『鶴舞図書館だより』No. 14, 1956.6, p. 1.
- 28) 「まず拡充工事に着手：郷土の文化も保存：赤木鶴舞図書館長語る」『朝日新聞（名古屋本社版）』1953.7.26、p. 6.
- 29) 「蓬左文庫の沿革」<<http://housa.city.nagoya.jp/history.html>>. [参照日：2006-12-17]
- 30) 前掲22)、p. 41.
- 31) 前掲8)
- 32) 名古屋市鶴舞中央図書館編『名古屋市鶴舞中央図書館50年史：大正12年～昭和48年』名古屋市鶴舞中央図書館、1974、214p、p. 71.

- 33) 「さようなら1955年」『鶴舞図書館だより』No. 8, 1955.12, p. 2-3., p. 2
- 34) 赤木貞夫「ひそかな決意」『鶴舞図書館だより』No. 21, 1957.1, p. 1.
- 35) 「市長に手紙を出す週間：道路舗装や国保実施など二百六十通集る」『広報なごや』No. 94, 1956.11.5, p. 3.
- 36) 「市長に手紙を出す週間」『広報なごや』No. 67, 1954.10.5, p. 3.
- 37) 大友喜一「図書館の充実と活用」『広報なごや』No. 96, 1957.1.10, p. 3.
- 38) 「市長に手紙を出す週間：学区再編や養老年金制度、街灯増設など百八十五通集る」『広報なごや』No. 106, 1957.11.5, p. 3.
- 39) 「市長に手紙を出す週間：駅西の改造を早くなど去年の倍・四〇八通集る」『広報なごや』No. 119, 1958.11.5, p. 1.
- 40) 小林橘川「移りゆく三階の窓」『広報なごや』No. 145, 1960.11.5, p. 1.
- 41) 服部鉦太郎「名古屋市熱田図書館」『図書館雑誌』Vol. 54, No. 12, 1960.12, p. 468-469., p. 468.
- 42) 前掲8)
- 43) 「私の公約」『朝日新聞（名古屋本社版・市内版）』1960.8.30、p. 12.
- 44) 前掲22)、p. 44-45.
- 45) 前掲22)、p. 60.
- 46) 「今年の読書週間から」『鶴舞図書館だより』No. 69, 1960.12, p. 6-7., p. 6.
- 47) 大川恵子「青山大作氏に感銘（全国図書館大会報告）」『図書館雑誌』Vol. 76, No. 12, 1982.12, p. 810-811., p. 810.
- 48) 山本進「青山大作氏を悼む」『図書館雑誌』Vol. 78, No. 11, 1984.11, p. 721.
- 49) 前掲48)
- 50) 青山大作『図書館随想』青山イト、1987、174p.、p. 70.
- 51) 杉戸清「青山大作さんの思い出」前掲50)、p. 81-82.
- 52) 前掲50)、p. 71.
- 53) 「市長選挙：いよいよあす投票日」『中部日本新聞（市民版）』1961.4.27、p. 6.
- 54) 「名古屋市長選きょう投票」『中日新聞』1965.4.25、p. 1.
- 55) 「てい談：文化都市建設の方向」『広報なごや』No. 169, 1962.6.5, p. 2.
- 56) 丸山武「1区1図書館計画」『図書館なごや』No. 48, 1973.8, p. 2-3., p. 2.
- 57) 前掲22)、p. 96.
- 58) 「もっと文化を（名古屋市民の願い）下：建設・福祉について」『朝日新聞（名古屋本社版・市内版）』1964.1.7、p. 14.
- 59) 加藤善三「“市制百年目”の夢(7)」『毎日新聞（中部本社版・市内版）』1964.1.10、p. 14.